ありふれた職業で異世界最強―聖印と邪紋と転生者

袴紋太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グランクレストＲＰＧで遊んでいた現代日本の社会人

仲間内でのセッション中に雷に打たれ死亡、気づけば学生時代に逆戻り。

不可思議な力を手に、彼はクラスメイトと共に異世界【トータス】へと召喚される。

短編が思うように進められず、身内でやったＴＲＰＧを加えた作品をやってみようと思います。

原作主人公、ほか登場人物に対して厳しい表現がありますのでご注意ください。

目次

異世界へ ―――――――― 1
そういうことは自分らで解決しろよ 7
肉壁とガラクタとクズどもしかいねぇ 18
このクズがぁぁぁ!!! ―――――――― 28
どうして俺がこんな目に ―――――――― 43

異世界へ

Q　異世界に行ったらどうしますか？

A　死にます

なに？　随分と後ろ向きだなと？

君はあれだな異世界で英雄になってハーレムして金銀財宝に囲まれながら自分は面倒事に突っ込みたくないと口で言ってる奴だな？

異世界？　へぇ、ふぅん、ほお。

戸籍もない、確かな法的機関が存在するかも怪しい、医療技術が元の世界と同等である保証もない。

一歩間違えればデスムーブ、そんな所に行きたいとは自殺志願者かただのドMか、キ○ガイだ。

無駄な前置きはここまでにして、結論から言おう。

俺は、異世界に来ている。

◆◆◆

ＴＲＰＧ、知ってる？

そうそう、テレビゲームではなく机の上でルルブ片手にダイス持って遊ぶ元祖ＲＰＧ。

学生時代から続けてきた遊びは、社会人になってもなんやかんやで集まって、ビール飲みながらわいわいやるもんだ。

そこで雷が落ちて全員くたばるのは想定外だが。

いや全員かは分からない、死んだときの事など「あ、死んだわ」と漠然に感じただけだった。

気が付けばそう、夕暮れどきのレトロな教室でボンヤリしていたわけよ。

輪廻転生、というやつか？

悟った人にも神の子にも会っていないし、そいつらの舎弟も顔見せていない。

自称お偉い神様がいないのはいいことだ、死んだからニューゲームとかどんな罰ゲームださっさと殺せ。

あ、死んでたわ（笑）

顔も変わらず、名前も、家族構成も変わらず、ただただ昔の中学時代に戻ってきた。

今までのがただの夢だったのだと言われれば、それもそうだと頷けてしまうくらい変わらない。

だが覚えている、楽しい記憶、苦い記憶、忘れたくなることもある。

なにより手に浮かぶ【馬鹿げた代物】が、これが本来ありえない展開なのだと知らしめた。
聖印、クレスト、右手の甲に浮かぶ紋章、死ぬ間際までやっていたゲームの力。
グランクレストＲＰＧ、そこに登場するファンタジー的な能力。
それが自分にある。
頭を抱えて唸り声を上げたのも無理はない。
意味がわからない、ハッキリ言って急展開すぎる――――が、正直なところ何も変わらなかった。
だってそうだろう？
平和な現代日本で、化物や強大な敵と戦う力が何の役に立つ？
金運やら、脳味噌の出来をよくして貰った方が幾分かマシというもの。
役に立つというなら学校の勉学というものが、実際に馬鹿にできないということ。
人間関係というものを疎かにすれば、たちまち痛いしっぺ返しを食らうということ。
これらが分かっている事くらいのものだ。
ともなれば、学業を疎かにせず、程々に交友というものを大事にし、将来的に前世よりもいい学校に入って就職する。
夢がないことだが、この程度のものだ。

学歴社会というのは伊達ではない、人は中身よりも外見と結果を見るのだから。
これからも社会の波の中、特に変わることなく歯車となっていくのだろう。
そう思っていた。
そう、信じていた。
この日が来るまでは。

◆◆◆

「何時までも香織の優しさに甘えるのはどうかと思うよ、香織だって君に構ってばかりはいられないんだから」
また始まったよ、顔を顰めつつ青年――――高円寺清正は、このクラスになって何度目になるか分からない溜息を吐いた。
親の転勤、それに合わせて別の高校に入る。
それ自体はいい、だがクラスメイトというのが非常に面倒だ。
このクラスではイジメが行われている、本人が相手にしていないため一概にそうとは言い切れないが、ある。
南雲ハジメ、一見して特徴的な要素のない地味な生徒。
何故そんなのがイジメの標的になったのか、原因は二つ。
一つは彼はアニメやゲームなどのサブカルチャーを好む、俗に言うオタク趣味であっ

た。
思春期ということもあるからか、男女共にオタクへの評価が気持ち悪い、不健全であるなどマイナス方面に傾いていた。
またハジメ自身も遅刻スレスレの登校、授業中の居眠りなど優等生とは言い難い生徒だというのも低評価に拍車をかけている。
本人にそれを改める気がない、素振りも見せない。
結果、南雲ハジメを評価する人間は少ないのだ。
それに加えてクラスのマドンナ（古い）的女子生徒が、ハジメに対して友好的に振る舞い。
リーダー役が正義感を持って注意…というには些かいきすぎだがを行う。
それが更に周りからの視線を冷たくし、そして本人はどこ吹く風。
誰か一人がやめれば簡単に終わるこの喜劇、関わることすらあほらしい。
結局はガス抜きだ、イジメ被害というのが出ていない分見えづらいだけ。
罪悪感など感じない、ただのゲーム、時が流れあんな事もあったなと笑って流す程度のこと。
これを喜劇と言わずになんと言う。
ああまったく、何故俺はこんなクラスに編入されたのか。

予鈴が終わり、一限目の教師が教卓に立ったとき。

「――――――――」

光が教室を飲み込み、中にいた生徒と教師だけが忽然と消えた。

これは本来訪れなかったＩＦの物語。

主人公（原典）という存在が最強になりえない世界。

そういうことは自分らで解決しろよ

剣、と書くと両刃のロングソードを思い浮かべる人が多いだろう。
小説やゲームなどにおいてポピュラーな武器であり、見た目や良さや権威の象徴であることも含めて人気は高い。
だが史実における戦場の主武装といえば槍か弓、時は流れて銃に至るまで、剣はあくまで副武装でしかないのだ。
それで必要ない、と言い切るには惜しい実用性と対応力。
まぁ何が言いたいかといえば、異世界というものに来てしまったという実感が出てきたということだ。
◆◆◆
光に包まれ、気が付けば豪奢な神殿。
周囲にはローブを纏った変人ども、奥には威厳漂う煌びやかな格好の老人。
何のジョークだ、眉間にシワが寄っていく。
この集団のリーダー格であろう老人は、老いによる衰えを感じさせない覇気を纏いつ

つ生徒達を歓迎した。
「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様、歓迎致しますぞ」
「私は聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシュタル・ランゴバルドと申す者――以後、宜しくお願い致しますぞ」
集団誘拐で起訴してやろうか。
奥へと案内されイシュタルト名乗る老人は恭しく事の経緯を語り始める。
端的に纏めるとこうだ。
この世界は【トータス】と呼ばれる異世界であり、人間族（ホモサピエンス）、魔人族（ミュータント）、亜人族（獣モドキ）など多種多様な種族が生きる世界。
人間族は北一帯で威張りちらし、魔人族は南一帯でオラついて、亜人族は東の巨大な樹海の中でビクついている。
人間族と魔人族が何百年も無駄な戦争を続けており、人間族は数で勝り、魔人族は個の強さで勝るため決着がつかない。
最近になって魔人族側が【魔獣】と呼ばれる怪物を使役し、パワーバランスは崩壊。
結果、この世界の【神】と呼ばれる【エヒト】という存在が、人間族を救うため異世界から勇者を召喚した
つまるとこ俺らが呼んだわけじゃねぇから、お前ら返すとか無理だから！

頑張って使命果たせば帰れるんじゃね、頑張ってねー

…ふざけてんのかこいつら、さっさと滅びろ。

一緒に飛ばされた社会科教師の畑山愛子も、保護責任者という立場から反論するも暖簾に腕押し。

それも仕方がない、こちらには何もないのだ。

金、住居、食料、此処の常識も、文化もなにもかも。

声を荒らげて反対するのは簡単だ、したとしても何も生まれない。

口惜しい限りだが、今はこいつらに従う他になし。

まったく、どうしてこうなったのだ。

◆◆◆

渡された剣をひと振り。

ヒュンッと風切り音が耳に響き、まっすぐに天へと掲げてみる。

今生どころか前世でも使ったことなどないが、不思議と手に馴染む物があった。

鍛錬場では己以外にも各々適性の高い武器を構え、おっかなびっくり振り回すクラスメイト。

日常的に武器を使用する機会の存在しない、現代日本の高校生。

彼ら彼女らがいきなり戦場に立ったところで結果は見えている。

そのためあのご老人は教会の総本山である【神山】の麓。
そこにある【ハイリヒ王国】にて生徒たちの訓練と施すつもりらしい。
国王陛下のありがたーいお話を聞き流し、翌日には座学と訓練開始。
縦に長い長方形のプレート、銀色の艶が煌くそれが生徒たちに配られる。
訓練を担当する王国騎士団長メルド・ロギンスが、これは【ステータスプレート】と呼ばれる代物だと?を浮かべる生徒たちに説明した。
神代の技術で作られた、現在では再現不可能の道具――アーティファクト。
ステータスプレートはその名の通り持ち主の能力などを数値化できる道具。
トータスでの身分証明書ともいうべきそれは、【通常】のステータスを表示する。

高円寺清正　１７歳　男　レベル：１
天職：紋章剣士
筋力：１５０
体力：８０
耐性：６０
敏捷：６０
魔力：７０

魔耐：８０
技能
・剣術［＋二刀流］
・火属性適正
・言語理解

僅かな思案、中央で周りの生徒や騎士たちから流石は勇者だと讃えられているリーダー格――――天之河光輝に目をやる。
「――――存在感を示すべきか」
刃引きされた剣をもうひと振り引っさげ、中央へと足を向ける。
その途中ハジメの横を通り過ぎたとき、偶然彼のステータスを見てしまった。
全ステータスａｌｌ１１０、技能もほぼなし。
大変だなと内心で手を合わせる、どうにかする義理はない。
人だかりに向かって歩く、自信に満ちた表情だ。
周囲の表情も見る、そこには確かな信頼の色が浮かんでいる。
責任を取る立場になるのは御免だが…
「天之川くん、一つ手合わせ願えるかな？」

いいように使い捨てられる立ち位置になるのも、お断りだ。

◆◆◆

鍛錬場の中央、二人の青年が武器を構え対峙している。

一人は天之河光輝、クラスのリーダー的存在であり、容姿、性格、実力共に勇者と呼ぶに相応しい青年。

対峙するのは、この春から転校してきた高円寺清正。

どちらかといえば線の細い光輝と比べて逞しい体躯、どちらが戦士かと問われれば一目瞭然。

光輝は正眼の剣を構え、対する清正は二本の剣を逆手に持ち腰だめで構えている。

剣士というよりも西部劇に登場するガンマン。

立会人を請け負ったメルドの手が下ろされ、二人の剣士は同時に地面を蹴り上げる。

上段からの唐竹割りを半歩下がることで空振りにさせ、右の剣を横薙ぎに振り抜いた。

鼻先を掠めるも直撃せず、大ぶりから引き戻した剣を縦のように構える光輝。

そこへすかさず追撃で左を逆袈裟で斬り上げ――るかと見せかけて距離を取る。

周囲は初撃で終わると踏んでいたのかざわめきが広がり、光輝の顔には困惑と驚きの色が見えた。

一刀流と二刀流、どちらが優れているというのは議論するに値しない。
どちらにも利点があり、同時に欠点が存在する。
一刀流は威力と速度、二刀流は手数と間合い。
勝敗を分けるのは――使い手の技量と、戦いの流れ。
ヒュン、ヒュン、ふた振りの剣が空を切り、いまかいまかと踊っている。
攻撃するのか？
しないのか？
右からか？
左からか？
それとも同時？
正面？
側面？
これはフェイントか、本命か。
既に光輝の間合いは掴んでいる、悩みを抱えたまま剣を振れば――
「しまっ!?」
途端に懐への侵入を許し、右のフェイントで釣り上げられてしまう。
横跳びで回避しようとするも、そこへ待ってましたと左から追い打ちが飛んだ。

しかしやられたままではいられんと、光輝は追い打ちを剣で受け止め大きく振り払う。
ビリビリと左手に衝撃が走る、掴んでいたはずの武器は跳ね飛ばされた。
慌てることはない、大勢を崩したのはあちらだ。
右の剣を両手で構え直し――――最後の一撃が。

ガキィン!!!

互いの剣が手から離れ、無機質な音を立てながら転がっていく。
「そこまで!」
相討ち、というべきか。
最後の最後で気が緩んだのか、両者の剣を跳ね飛ばすという結果に終わったのだ。
まぁ、そう仕向けたのだが。
「やはり強いな、いけると思ったんだが」
「ああいや、危なかったよ。君も強いんだな高円寺くん」
互いに賞賛を送り、痺れたように震わせる右手で握手を行う。
こちらも危なかったという演技だが、こういうのも馬鹿にできないものだ。

生徒たちがざわめく。
「やるじゃん」と。
「お前すごいな」と。
引き分けになるだけの実力を持つが、圧倒できるほどでもなく、みんなのヒーローを称える人物。
転校してきたばかりの自分は、〝そういう人物〟であると刷り込めただろう。
評価というものは厳しいものだ、追い詰められれば尚更。
こんな世界に居着くつもりはない。
こいつらのために傷つく義理もない。
しかし働かず、怯え隠れるものを人は侮蔑する。
侮蔑は差別を生む、差別は健康に極めて有害だ。
ならば勇敢であろう。
ならば慈悲深くなろう。
彼らにとって望む仮面を着けてやろう。
極めて不本意であるが、高円寺清正という偶像に演じる方が都合がいいのだ。
静かに、剣に輝やいていた【紋章】が消えていく

高円寺清正　１７歳　男　レベル：１
天職：紋章剣士／君主
筋力：１５００
体力：８００
耐性：６００
敏捷：６００
魔力：７００
魔耐：８００
技能
・聖印／セイバー　第一階梯解除
・剣術［＋二刀流］　第二階梯解除
・統率　第一階梯解除
・タフネス　第一階梯解除
・強運［＋天運上昇Ⅳ］　第二階梯解除
・装備熟練［＋武器の印］　第二階梯解除
・■■■■／経験点不足により未解除
・■■／経験点不足により未解除

・■剣／経験点不足により未解除
・■属性適正／経験点不足により未解除
・金■力／経験点不足により未解除
・■地／経験点不足により未解除
・■■／経験点不足により未解除
・技■熟練／経験点不足により未解除
・言語理解

肉壁とガラクタとクズどもしかいねぇ

異世界召喚という珍事から数日後、社会科教諭、畑山愛子は人気のないベランダで夜空を見上げていた。

夜空が広がり、星の輝きが都会の喧騒に疲れた心を癒すだろう。

とは言ってもこの状況で呑気に星キレーとかのたまうほど、愛子はお気楽な人間ではなかった。

「どうすればいいんだろう…」

畑山愛子、２５歳、独身。

小柄な身長と童顔から生徒たちと同い年に間違われてしまいそうだが、立派な大人。

彼女は善性の人間だ、この状況下で己ではなく生徒たちの安否を気遣える。

職務であることを差し引いても、疑いようもない事実だ。

それゆえに責任感が強く、現状において何も出来ない己の不甲斐なさを責めている。

天職、その人物が最も適しているとされる職業。

この異世界【トータス】では戦闘に関わる天職を持つ人間は希少だ。

モノによっては万人に一人という割合、まるでゲームのように与えられた手札以上の事は出来ない。
愛子は作農師、字の通り戦闘に向いた職業ではない。
約一名を除き、生徒たちはほぼ全員が戦闘職が天職とされていた。
召喚から数日たった今や、各々の武器を持ち訓練に励んでいる。
生徒を守ることができない。
生徒を助けることもできない。
なんて、なんて情けな「先生、どうしましたか？」
思考のループに入っていた所に声をかけられ、慌てて振り向くと男子生徒が立っていた。
転校生の高円寺清正は、木の樽で出来たカップを愛子に差し出す。
「どうぞ、今夜は体が冷えますから」
中身は赤い液体、香りからしてワインだろうか？
「俗に言うホットワインってやつです、厨房に顔を出したら頂きまして」
酒精はほとんどないみたいですよと、清正は己の分を口に含み胃へと流し込んでいく。
「未成年の飲酒は認められません！」

「うおっと!」
器を取り上げるが、既に中身は空。
道中で大半を飲んでいたのだろう、愛子の目が釣り上がる。
それに対して青年はあははと愛想笑いを浮かべ、降伏するかのように両手を上げるのであった。
善意で持ってきてくれたということもあり、強く叱ることはせずアルコールの危険性と道徳について愛子は語りだす。
「グビリッ、いい高円寺くん。貴方は未成年で、いくらここが日本じゃない所でもお酒を飲んじゃいけないの」
「グビリッ、そもそもアルコールは若い頃から摂取し続けると中毒症状を引き起こすこともあり」
「グビリッ、また君のような年頃の子には興味が強いだろうけど」
所々で相槌を打つ清正に説教するも、気づけばこっちの分も空。
それとなーく目配せするも、料理長の親切だったものでと肩をすくめられる。
「うううう、ごちそうさまです…」
「いえいえ、貰い物を美味しく飲んで頂けたならそれでいいですよ」
「…何か、相談したい事とかあるかな?」

数多い懸念には清正の事もあった。
転校生であり、クラスに転入したのもつい最近。
時期も少しずれてしまい、クラス替えのタイミングにも遅れたため周囲から浮いていないか気になっていたのだ。
「いえ、みんな気のいい奴らですんで。天之川くんも親切にしてくれますから助かってます」
愛子の懸念に反して彼のコミュ力はかなり高かったのだ。
周りを立てるというのか、過度な主張をせず他者との仲介をする場面が多く見られている。
今もどちらかといえば年上の男性と話しているかのような、安心感を感じていた。
「(と、年下の方が大人に見える…)」
心中でショックを受ける愛子。
同年代と比べて頭一つ大人びた印象を受ける青年と比べ、己の子供っぽさはなんだ。
頭を抱えぼやけている自分、そんな自分を心配して暖かい飲み物を持ってきてくれた気遣い。
これではどちらが大人なのか分からないではないか。
「先生、今日もみんなヘトヘトになって戻ってきました。勿論俺も」

「？」
「そういうとき先生がお疲れ様って言ってくれるのは、凄くありがたいんですよ。ホッとするというか、日常というか」
「高円寺くん…」
そう言う清正の表情には、僅かながら不安と疲れを感じさせた。
当然だ、彼はまだ子供なのだ。
周りや自分を気遣って明るい振る舞いをしているが、本当は不安で仕方がないのだ。
愛子は清正の両手を取ると、真摯な眼差しで青年の目を見る。
「これからは何でも先生に相談してちょうだい、辛いことも、苦しいことも、一人で抱え込んじゃダメ…いいね」
鳩が豆鉄砲を食らったようにパチクリと目を瞬かせた青年は、気恥ずかしげに頷いた。
「（やるぞ！　大人として、先生として、私がみんなを守るんだ！）」
決意を胸に、小柄な教師は改めて誓うのであった。
◆◆◆
あ～めんどくせぇ、てめぇが折れると余計面倒なんだよしっかりしろ。
一緒になって飛ばされてきた女教師のテンションが目に見えて落ちていた。

分かりやすく上下関係を構築できる存在は重要だ、なにより同性である女子生徒達にとって彼女の存在は大きいだろう。
なにかの拍子にタガが外れ、欲望に従った男共が女生徒を襲う…なんてケースがあるかもしれない。
本音を言えば性欲処理の観点からして、そちらの方が未知の性病に感染するリスクを減らせるため賛成しよう。
だが今後のクラスメイト同士の関係を考えて、無用な火種を残したくはない。
今はまだ新しい環境に慣れていないため気にはしていないが、そっち方面の処理を考えねばなるまい。
果たして王族やらがそこらへんを考慮してくれるかどうか…
とにかく、愛子に潰れられると色々まずいので、こうして演技しつつメンタルケアに励んでいるのだ。
「(ま、意図せず捌け口は見つかったのが幸いか)」
南雲ハジメ、彼の存在が予想外にプラスに働いた。
いきなり強くなったとかそういうことではなく、ストレスを発散するための行為として彼への暴言などが出てきたのである。
当然といえば当然だ、元々カースト最下位で、能力も極めて低い。

異世界召喚という非常識な状況により発生する恐怖、不安、理不尽への怒り。
それによって発生するストレスを解消するため、「明確な弱者」を見下すのだ。
現状から見て少なからず効果が出ているだろう、約一名が精神的な負荷を受けているかもしれんがそれはそれ。
一種の副次的被害（コラテラル・ダメージ）だ、仕方がない、涙を流して感謝しよう。
サンキュー、グラーシアス、オブリガード。
「それじゃ、俺はこの辺で。おやすみなさい先生」
「おやすみなさい、高円寺くん」
ガラクタ教師と別れ、人気の少ない通路を進んでいく。
この数日間、城の騎士やメイド、道中ですれ違う人々から幾つかの情報を得ることに成功した。
勇者とその仲間たちという肩書きは、存外に役に立つ。
宗教、価値観、地理、貨幣、常識に関わることが大半。
やはりこの世界では【エヒト】神を信仰する聖教教会が、かなりの権力を保有していること。
魔人族、獣人族は差別の対象であること。
分かったのは大体この程度か。

「（情報が足りん、どうすれば帰還できる？　そもそも誰が敵で、誰が味方だ？）」

事の発端である魔人族、間違いなく敵だ死ね。

自分たちを【トータス】に召喚したという【エヒト神】、敵だとも言えないが味方には分類できない死ね。

聖教教会、こちらも敵対はしていないが信用できない死ね。

クラスメイトと畑山教諭（肉壁）、味方ではあるが信用する必要もない。

…明確に味方と呼べる者たちが少なく、権力者に逆らうなど馬鹿を見るだけだ。

改めて自分のステータスプレートを確認する。

高円寺清正　１７歳　男　レベル：１

天職：紋章剣士／君主

筋力：１５００

体力：８００

耐性：６００

敏捷：６００

魔力：７００

魔耐：８００

技能

・聖印／セイバー　第一階梯解除
・剣術［＋二刀流］　第二階梯解除
・統率　第一階梯解除
・タフネス　第一階梯解除
・強運［＋天運上昇Ⅳ］　第二階梯解除
・装備熟練［＋武器の印］　第二階梯解除
・■■■■／経験点不足により未解除
・■■／経験点不足により未解除
・■剣／経験点不足により未解除
・■属性適正／経験点不足により未解除
・金■力／経験点不足により未解除
・■地／経験点不足により未解除
・■■／経験点不足により未解除
・技■熟練／経験点不足により未解除
・言語理解

聖印発動時での能力がこれ、経験点を何処で確保できるかは不明。
恐らく死亡する直前で使用していたキャラを元にしていると考えれば、経験点を獲得することで徐々に能力が開放されていく。
そういうことだと考えるしかない、今のところは。
今は流れに身を任せることしか出来ないだろう。
何もない、金も、権力も、力も。
薄暗い城の通路を進みながら、清正は部屋に戻るのであった。

このクズがぁぁぁ!!!

は～いみんな並んで～
えっちほっちら歩きましょう。
あ、モンスターがいるよー
みんなで頑張って倒しました。
僕らはみんな最強だー
みんな陽気に笑ってる。
あ、なにか光ってる～
それ罠だよー
滅茶苦茶骸骨やデッカイ化物が出ちゃったーあははー
死ねばいいのに。
◆◆◆
【オルクス大迷宮】、その名のとおり地下１００層からなる巨大な迷路。
中には無数の怪物――――魔物が生息しており、進むほどに強力な魔物が探索者の行く

手を阻む。
名称や内容を考えれば酷く陰鬱なイメージを抱きかけるが、その入口は博物館の入場ゲートを彷彿とさせる門が設置されており。
さらには受付窓口で容貌の優れた管理員が出入りする者たちの人数などを記録していた。
なんでも魔物とやらの体内には【魔石】という物体が存在し、心臓部ともいうべきそれは【トータス】において幅広く活用されていた。
日常生活に使用する魔道具、つまりは【魔石】を原動力とした機械。
軍などが使用する強力な魔法、【固有魔法】を使用するための魔法陣を描く原料。
それ以外にも多種多様な使い道があるそれは、この世界において無くてはならない必需品と言えるだろう。
魔物の死体から採取できる皮、肉、骨、角、それらの素材も売買されているらしく。
需要と供給があるならば、そこには利益が発生し。
金が流れれば人が集まり、人が集まれば物が生まれ流れていく。
魔石と素材を入手する冒険者の誕生は必然であり、彼らを対象にした商売が生まれるのもまた必然。
【オルクス大迷宮】の近くに栄えている宿場町ホルアドにて、勇者様とその仲間たちは活

気あふれる市場を物珍しげに眺めていた。
その中には清正の姿があり、彼も知的好奇心を抑えられないようで――――
「(さぁ何が売れる？　価値は？　貨幣システムは？　可能な限り情報を集めたい、あと金金金金！)」
俗物的金欲が優っているようだ、どうしようもねぇ。
談笑しつつ目ざとく売れ筋を確認し、一行は宿屋にて休息を取る。
今回の遠征はずばり、勇者たちの実戦経験を養わせるためだ。
王都周辺の弱い魔物ではなく、ダンジョンに住み着く少し強い程度の魔物。
ここで一つ難易度を上げる…といのは建前で、上は何かしらの目に見える結果を出したいのだろう。
新兵のそれではなく、異世界から召喚された勇者たち。
当然幾つもの思惑が絡み合い、そこには教会と貴族も例外ではない。
しかしこの大迷宮による実践訓練は、騎士団長メルドにとってはいつものことだった。
落ち着いていつも通り、それで問題ない。
問題ないはず、【だった】。
◆◆◆

マジ死ねばいいのに。

騎士団御用達の宿屋Mその一室に案内されるとベッドに突っ込んでいる先客がいた。

南雲ハジメ、絶賛メンタルサンドバック状態のそれは清正の入室に驚いたのか、慌てて顔を上げたのであった。

何こいつ、いきなり人様にケツ向けて寝転がるとか何様？

思わず全力で尻キックをかましたくなる衝動にられるも、軽く咳払いをしつつ荷物を置く。

「やぁ南雲くん、そのままでいいよ。結構長い距離を歩いたからね」

足がパンパンさと困ったように見せているが、内心では気分最悪である。

いや別に彼個人が嫌いというわけではない、無論好ましくなど天地が逆になっても思わないが。

ただ単に一人部屋でないとくつろげないだけだ、心の狭い男よ。

対してハジメの方はというと、少々気まずかった。

転校生であり、まだクラスに編入されてから日が経っていないとはいえ清正の存在感は小さくなかった。

異世界に来てからというものの、生徒たちの諍いを仲裁する場面も多く、実力も天之川光輝に優らずとも劣らない。

正義感の押し売りがない分、こちらの方がより好印象だった。
クラス内カースト清正（最上位）とハジメ《最下位》、正直会話するのもしんどい。
ボッチ的こじらせを発揮するハジメ、上から目線自己中の清正。
ベクトルこと違いがあれど、ダメさ加減は似たようなものだった。
ハジメは城から持ち出した迷宮低層の魔物図鑑を開き、清正はベッドの上で用意した道具の点検を行う。
投げナイフ、松明、ポケットティッシュ、包帯、持ち歩くには少しばかりかさばるがこの手のダンジョンアタック系で用心するに越したことはない。
まぁ、あくまでＴＲＰＧでの経験則に過ぎないのだが。
「（つーか少しは喋れよ、ただでさえ陰キャな奴は部屋の空気をマイナス方面に下げるんじゃねぇよ）ところで南雲くん、今回の遠征拒否しても良かったと思うんだが？」
「あ、うん、ごめんね。迷惑かけちゃって」
「迷惑とか、そういうのじゃないさ。錬成師だったかな、君の天職は前に出て戦うタイプじゃないと思ったから」
生産系職業が現場に出てどうすんねんと、ハッキリ言って現状ついてこられる方が迷惑だ。
周りも期待していないのだから、適当なことといって辞退すればいいのに。

いや、そこらへんも自分で動くつもりがないのだろう。
要は自己判断力が弱いのだ、周りがこう言えばハイハイと頷いてしまうタイプ。
珍しくもなく平時ならば特に気兼ねすることもないが、怪物との殺し合いでそれでは非常に困る。
「天職なんて、ただの目安に過ぎないよ。自分に一番合った仕事ができる人間はそういない」
「君にしかできない仕事がある、まずはそれを探すべきじゃないかな」
偉そうですまないと、後頭部を掻きつつ道具の点検を続ける清正。
ハジメはというと困惑していた、自分の役目を探せなど両親やその関係者以外から言われたことなどなかったのだ。
「(とは言っても、どうすればいいだろう…)」
己が使える手札はあまりにも矮小で、先行きなどさっぱり見えない。
結局頭を悩ませるのも馬鹿らしくなり、ハジメは瞼を閉じた。
さっさと寝てもらったほうが気楽なので、清正はそれを無視して作業を続ける。
日が落ち、各々が寝静まった頃ドアがノックされ、ハジメは出て行った。
特に気になるわけでもなく、彼が戻ってきても反応は示さない。
興味がないことを問いかけるのは、ある意味で最大の苦行なのだ。

◆◆◆

翌日、騎士団長とその部下を戦先頭と最後尾に置き、生徒たちは【オルクス大迷宮】の中へと入っていった。

通路は縦横約５ｍ、光源がないにも関わらず薄ぼんやりと内部を照らしていた。

事前に聞いていた情報では緑光石という特殊な鉱物が埋まっているため、それが明かりの役割を果たしているらしい。

道中に出てくる魔物はステータス上位の清正や光輝たちが、騎士たちと交代で処分していく。

「（悪くないな、この武器）」

清正の手に長剣が短剣が一つずつ握られていた。

短剣の方は何の変哲もない鉄製のものだが、長剣の方はハイリヒ王国が管理しているアーティファクトの一つ。

魔力を込めることで刃を修復し、長期間の戦闘に耐えられる代物だ。

まずなにより安定性、清正としては光輝の使う【聖剣】と呼ばれる大剣と比べてもコチラを取るであろう。

しかし所詮武器は武器、使い手がヘボをすればそこでおじゃん。

こちらに背中を向けていた女子生徒――――八重樫雫の背後から忍び寄るネズミのよ

うな魔物を切り捨てる。
「ッ、ごめん、助かった！」
「気にしないでくれ、先は長い。落ち着いていこう」
背中合わせで互を守り合うように構える二人、雫は不思議とこの背中が頼もしく感じた
「（簡単に消耗されちゃ肉壁の意味がない、どうせ死ぬなら俺を守って死ねよ、いいな？）」
こっちは最低の屑野郎なわけだが。
一行は徐々に歩を進めていき、このペースならば目標としていた２０階層へ到達できるだろう。
清正の心中に安堵が訪れた、その時。
「だったら俺らで回収しようぜ！」
なにを？
前列近くから声がすると、誰がが前へと飛び出した。
檜山、ハジメを虐めている主犯格の男子生徒。
崩れかけた壁から光るものが見える、恐らくアレが狙いなのだろう。
ダンジョン、宝、となれば次は…

檜山が光るそれに触れた瞬間、彼の両脇に赤黒い魔法陣が浮かび上がった。
するとそこからは通路を埋め尽くす骸骨の群れ。
動く死体はそれぞれ折れかけた、錆びた剣や槍などを構えこちらへと迫ってきた。
いや、その程度ならば楽だった。
骸骨たちとは比べ物にならない巨体。
圧倒的な存在感と敵意が、揺らぎなく生徒たちへと向けられ――――誰かがソレ【ベヒモス】と呼んだ。
グルァァァァァァァアアア!!
「全員下がれ――――――――――――――――――!!!」
気づけば声の限り叫んでいた。
アレはヤバイ、とんでもなくヤバイ、本能が警鐘を鳴らしていた。
「騎士団長！　申し訳ないが騎士の方々に足止めを願いたい、我々では全滅する！」
「――っ、ああ！」
「後衛はそのまま退避、慌てずにそのまま下がれ！　前中衛は前後に分かれて後衛を守るんだ！」
「俺が先導する、行くぞ！」
いよし、殿と肉盾用意。

仲間を守るため先頭に立つと、脇目も振らずに逃げ出すでは意味合いが違う。
このまま肉盾を後ろに備えつつ安全に退散…それとそこの屑野郎、てめぇ顔おぼえたかんなぁ!?
駆け出す清正、それに続く生徒たち(肉盾)、そんな中で一人だけが怪物たちに向かっていった。
ハジメだ、非戦闘員の南雲ハジメだ。
よく見れば光輝を含め前衛の生徒が何人か残っている。
阿呆が、お前らが逃げねば騎士たちも逃げられんのだぞ!?
彼らの役目は召喚された勇者たちを守ること、こんなところで死なせたらどうなるか。
だからこそ殿を任せた、ある種の気遣いでもあったのだ。
それを勇者(大きな)とその仲間(お世話)たちがが無駄にしたのだ。
だが変わらない、可愛そうだがこっちの安全が第一。
割り切り、歩を進めようとした矢先。
誰かに腕を掴まれた。
悲鳴が出かけるのを気合で堪え、それが白骨化していない人間の手であることに安堵。

視線を上げて、掴んだのがクラスのマドンナ――ー白崎　香織であることが分かる。
「ハジメくんを、助けて…」
不安と恐怖で彩られた眼差しが、手から伝わる震えが、間違いなく高円寺清正にかけられた願いなのだと知らしめる。
ワッツ？　イッツミー？
「お、お願い、貴方なら、ハジメくんを」
ヘイヘイヘイ、ちょっと待てやクソビッチ。
なんで俺があいつを助けなきゃいけないの？
それこそ勇者様に任せればーってふぁ!?
こっちに向かってくる甘いマスクの勇者様＋その一行。
その無効ではなにかの技能なのか、地面を掘り返して壁にしつつ怪物たちを足止めするハジメの姿。
ぷぎゃーだっせぇーーーーー！見下してたやつに守られてやんのー！
でそれを助けろとかふざけんなや阿呆がぁぁぁぁーーーーーーー!!!
だがどうする、この発言は既に肉盾共に聞こえている。
振り払えばどうなる、仕方がないとするか、非難が向くか。
決まっている、この状況での恐怖を押し付けるために俺が罪人扱いだ。

正当性だとか、そんなものを思春期の糞餓鬼共が考えるわけがない。
逃げるだけなら、逃げるだけならいけるか…？
此処で清正はミスを犯した、いくら罠とはいえある程度はなんとかなると過信してしまった。
過信の負債は、必ず首をしめてくる。
それを忘れていたのだ。
「分かった、白崎さんも早く逃げるんだ！　天之川くん、皆の先導を！」
返事を待たず入れ替わるようにして前に出る。
なんてことだ、なんてことだ、全てお前らのせいだ！（責任転嫁）
「南雲くん！　伏せろ！」
「高円寺くーーう、うわぁ!?」
何度目になるか分からない土壁をを作ったハジメは、抜刀しつつ駆け込んでくる清正を見て咄嗟に頭を下げた。
土壁を蹴り上がり、向こう側で押しのけようとするベヒモスの脳天――から生えた角へ。
「角なら頭蓋骨に振動が届く――」
長剣を、振り下ろす。

ガオンッという、車の衝突事故のような轟音。
僅かながらもベヒモスはたじろぎ、体勢を崩していた。
頭蓋を揺らせば、脳も揺れる。
いくら怪物であろうと、人知を超えた化物であろうと。
血が流れるということは心臓があり、眼で物体を判別しているならば脳があるはず。
ただの思いつきであったが、それが功を奏した。
「あばよ……！」
そこへもう片方の短剣を、巨躯に合わぬつぶらな眼球へと刺し込んだ。
ぐるおぉぉぉぉおおおぉぉおおおぉぉぉおおぉおおお
激痛に暴れまわる怪物を無視し、ようやく状況が見えたハジメと共に駆け出した。
「高円寺くん、たすかっ「いいから走れ！　怒り狂った獣が突っ込んで来るぞ！」は、はいぃ！」
上手くいった、上手くいった、上手くいった！
成功だ、生きている、問題ない、大丈夫だ！
急げ！　走れ！　逃げろ！
二人の頭上を何かが通り越していく、魔法だ。
生徒たちが次々と攻撃魔法を打ち込み、ベヒモスを足止めしている。

怪物との距離は既に３０ｍ以上開いていた、これならばと確信が生まれる。
ここで清正は、また二つのミスを犯す。
一つめ、ベヒモスとの交戦は予想以上に通路の床へとダメージを与えたこと。
地下迷宮なのだ、足の下にはまた別の通路があって当然。
二つめ、人間の嫉妬と恋心を甘く見たこと。
ベヒモスに向かって放たれたはずの火球が、軌道を変えてハジメへと飛んでいく。
咄嗟にそれを回避するも、着弾した箇所から広がる爆発と衝撃波。
完全な不意打ち、爆音と衝撃波で三半規管が狂ってしまった。
揺れる視界、揺れる足元、そして。
グルァァァァァァァァ!!
怒りに燃える隻眼のベヒモス。
爆発のダメージ、怒り狂う怪物の足踏み。
もはや、通路の限界値を超えていた。
崩れる足元、浮遊感は重力にかき消され落ちていく。
まだだ、もう一度死んでたまるかぁ！
まだ届く、届くのだ、手を伸ばせば、まだ…
グイッ

絶望が、いや死神に足を取られた。
ハジメが、清正の足を掴んでいたのだ。
こ、このクズがぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーー!!!!!
清正とハジメは、底の見えない奈落へと墜落していくのでありました。

どうして俺がこんな目に

気が付けば、水の音が聞こえていた。
グチャグチャになった意識が一本の筋に纏まる感覚。
いまだに揺れる視界の中、清正は身を起こした。
冷たい。
そこは巨大なプール…というよりも湖ともいうべき所であった。
共に落ちたのだろう、落下の衝撃で頭から血を流すベヒモスの上で気を失っていたらしい。
腰から下が水の中、なんとか這い上がり死体の上に寝転がる。
遥か頭上から降り注ぐいくつもの滝、恐らく壁に設計された水路から流れて込んでいるのだろう。
流れた水が集まった場所、貯水場…だと思われる。
ハジメの姿は見えない、落下の道中ではぐれたのか。
「それともバラバラになってくたばったか…」

どれほどの高度を落ちたのかは不明だが、クッションになったベヒモスの四肢が【ひしゃげて】いるのを見て数m程度でないのは明白だった。
頭上は天井すら見えない、まるで暗い穴がぽっかり空いているかのようだった。
「あのクズ野郎ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ!!!　よくも、よくも俺の足を引きやがったな!!!」
状況判断のすぐ後に湧いたのは憤怒。
歯を食いしばり、怒りの感情が噴出するのを止めることができない。
死んだなんぞ許さんぞ、生きたまま足を切り捨て小型の魔物共の餌にしてやる！
簡単には殺さんぞ、足の指から関節ごとに切り捨ててやるぞお！
動けぬ体で内蔵を貪られ、苦しみ悶え死なせてやる!!!
イカダ状態のベヒモスの上で殺意を漲らせる清正であったが、すぐに息を殺し周囲を見渡した。
何かいる。
それも一匹ではない、複数の【何か】が取り囲むように水中に潜んでいるように感じた。
直感か、思い過ごしか。
その答えは同意を待たずに開示された。

飛び出してきたのは鰐に似た生物だ、長い顎と鱗、違うのは頭に生えた角と鰭状になった手足だろう。
白亜紀に生息したというモササウルスが最も近いだろうか。
それらが十数匹以上、同時に獲物めがけて飛びかかってきた！
「チィッ！」
死体の上に陣取れば餌確定、水中は相手のステージで潜れば同じく餌。
思案の暇はない、行動だ。
安定感のない足場を蹴り上げ、目指すは今にも大顎で噛み砕こうとしてくる魔物…ワニモドキと呼称しよう。
ワニモドキの鼻先に手をかけると、曲芸の如くその背中へと乗り移った。
爬虫類共に食いつかれた死体は、瞬く間に鋭い牙と強靭な顎によって解体されていく。
骨まで砕かれ藻屑となるまで、そう時間はかからないだろう。
つまり、清正がこうなる可能性がそれなわけだ。
「冗談じゃねぇぞ!?」
振り払おうと水中に潜り込むワニモドキ、仲間たちがすぐ後を追ってくる。
もし手を離せば、身動きができない水中で奴らの餌に早変わりだ。

どうする。
どうする？
どうする!?
底の見えない水中、このままでは…
「…？」
すると何やら水底から光るものが見える。
目を凝らすまでもなく、それは顎門を開いた。
光っていたのは【瞳】だ。
「（嘘だろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーー!?）」
巨大な、巨大すぎる【蛇】が、己らを呑み込まんと水底から這い出てきたのだ！
ワニモドキも危機を察したのか慌てて旋回、急ぎ水面へと逆走する。
だがもう遅い。
清正はワニモドキの群れと共に、巨大な蛇に呑み込まれてしまった。
◆◆◆
「うおおおおおおおおおおおおおおお!?」
「滑り」、「落ちる」というのはこの事か、ウォータースライダーの如く清正は食道を滑落していた。

諸共に食われたワニモドキたちは、水中でないにも関わらずこちらへ飛びかかり食らいつこうとしていた。
「食われたのに元気だなお前ら!?」
持っていたはずの長剣はない、すかさず腰に差していた投げナイフを投擲する。
開いた口から喉奥へと突き刺さったナイフに【聖印】が浮かび上がると、ワニモドキは内部から爆散した。
「直接手に持たずとも効果は出るか…残り少ないがな!」
糞、糞、糞、どうして俺がこんな目に遭わにゃならんのだ。
それもこれも全てあの屑のせいだ、絶対に殺す!
俺を不幸にする奴はみなどん底に落ちて死ね!
食道内を転がりつつワニモドキの突撃を躱し、透かし、ギリギリを凌いでいく。
気づいていないのだろう、自身のステータスが急激に上昇している事に。
気づいていないのだろう、魔石の光を【聖印】が吸い取っていることに。
一匹、また一匹とワニモドキを駆逐していく。
この調子ならすぐに終わるなと安堵しかけた所で。
「へぇあ?」
世界がひっくり返った。

上から下が、下から上へ。
肉片と水と共にかき混ぜられて落ちていく。
今度はなんだぁーーーーーーーーーーーーーー!?
何が起きているのか、まずは腹の外へと視点を移そう。
◆◆◆
蛇は物足りなかった、この巨体故にあの程度の食事で満足できるはずがない。
しかし此処は牢獄だ、小さき体であった頃に水路から此処へと落ちた。
周りは敵だ、味方はいない。
喰らい、殺し、己の糧にして生き抜いた。
気づけば小さき己は巨大となり、この貯水場の主となったのだ。
しかし巨体が仇となり、水路を通ることができず出ることはかなわない。
ああ腹が減った、満腹になりたい、絶えず苛まれる空腹に蛇は焦がれる。
腹が減った。
腹が減った。
腹がザシュッ…!?
激痛、体から何かが出て行く、血？
遠い記憶の彼方に消えた筈の「痛み」に、蛇は僅かばかり呆けた。

――その次の瞬間、全身を無数の【剣】が貫いた。
違う、中だ、体の中から突き出たのだ！
蛇の体から見て楊枝程度の大きさでしかない【剣】は致命傷には届かない。
だが届かない故に、蛇は終わらぬ痛みに苦しんだ。
もうやめてくれ。
終わらせてくれ。
お願いだから――
もはや主としての矜持などなかった、元からあったとは言い切れないが…
蛇は巨体を壁めがけて頭から突っ込んだ。
死に際の馬鹿力か、堅牢に作られた壁は崩れ。
さらにさらに下へと続く奈落へと落ちていくのだ。
◆◆◆
「うおっぷ、おげぇ」
腹を【聖印】で強化した短剣で切り開き、ようやく清正は怪物の腹の中から脱出した。
蛇の胃液と血肉まみれの体からは異臭が放たれ、大量の血液が生理的な嫌悪感を与えてきている。
「何がどうなって…また通路か？」

上層と景観が似ている石造りの通路。
壁同士を繋ぐパイプのように伸びた蛇の腹が、どうにもミスマッチな印象を受けた。
そこで気づく、蛇の体に無数の「穴」が空いていることに。
「なんだこれ…ッ」
詳しく調べようとした時、清正の右肩に「風穴」が出来た。
「がぁ!?」
右肩を抑えて崩れ落ちる清正、先程まで頭部があった空間へと何かが突き刺さる。
細長い、白濁色の棒のようなもの。
あのまま立っていればこれに頭を貫かれ、脳味噌がこぼれ落ちていたかもしれない。
振り返りると頭に幾つもの鏃を備えた猪が、こちらを睨みつけていた。
先ほどのはアレだ、この猪たちはアレを矢の如く飛ばしてくるのだ
それも一匹ではない。
通路の奥から続々と笑われてくる猪――アローボアの群れ。
此処は奴らの縄張りだ、領域へと侵入した外的を屠りに来たのだ。
だが、そんな事はどうでもいい。
どうでもいいのだ。
痛みは憤怒に、後ろから攻撃されたという事実が激情に。

畜生が。
畜生風情が。
この俺を傷つけ、血を流させた？
「下等生物がぁぁぁーーーーーーーーーーーー!!!!」
激昂と共に飛来する無数の矢を残り一つとなった投げナイフで切り払う。
強化を施してはいたが、元々主武装として扱えるほどの耐久力がなかったためか根元から折れてしまった。
だがそんな事はどうでもいい。
今はこの畜生共を狩り尽くさねば、気がすまない。
いつもならば怒りに耐えてでも逃げ出していただろう。
蛇の体内に戻り、頭の方へ向かい別の脱出地点を目指していたはずだ。
しかし遅い、もう耐えられない。
こいつらを殺さねば頭がおかしくなりそうなのだ。
次弾が放たれる前に、地面に叩き落とされた矢を拾い上げ――――駆け出した。
「どうしてこうなった!?」
まず最初に膝で中央のアローボアの額を叩き割る。
「こんな事望んじゃいなかった!」

矢を放とうとする個体の目に、手に持った矢を投擲する。
着弾と同時に爆発、首から先が消失したそれを一瞥することなく、清正は次の標的へと襲いかかった。
「転生だと!?　ふざけるな!」
脇腹を矢が掠める、拳に【聖印】を輝かせ爆炎を込めた打撃が放った猪を打ち据え、焼き尽くす。
「仕事も安定していた、昇進ももうすぐだった!」
頭蓋を叩き壊す。
「特別である必要などなかった!」
首をねじ切る。
「努力に応じた結果を出していた!」
死体を砲弾の如く投げつけ、動けない所を燃やした。
「俺は、ただ結果に応じた評価と地位が欲しかっただけだ!」
逃げるアローボアをそれ以上の速度で先回りし、床に叩きつけ粉砕する。
「異世界!?　勇者!?　屑共から得ねばならない信用!?」
焼く。
炎が、魔物を焼いていく。

「ふざけるなゴミ共が、死ね、ここで死ね！　死んでしまえ!!!」
魔石の輝きが聖印に吸収されていき、印の強さが上がってくのだ。
「あぎぃ!?」
アローボアの群れを死体に変え終わると、強烈な負荷が清正を襲った。
体をくの字に折り、過ぎ去る嵐を待つように体を横たわせる。
何だ、今度はなんだ…!?
首にかけたステータスプレートに文字が浮かび上がる、

高円寺清正　１７歳　男　レベル：３５
天職：紋章剣士
筋力：４１００
体力：３７００
耐性：３８００
敏捷：３５００
魔力：２５００
魔耐：３０００
技能

・成長補正［＋聖印濾過］［＋能力成長率上昇］［＋技能成長率上昇］［＋経験点増加］
・聖印／セイバー［＋伯爵］［＋聖印／マローダー］　第三階梯解除
・剣術［＋二刀流］［＋二刀流の巧み］［＋属性付与］［［重撃の印］［　第五階梯解除
・火属性適正［＋光炎の印］　第二階梯解除
・光属性適正［＋閃光刃の印］　第二階梯解除
・統率［＋カリスマ（聖印）］［＋奮起の印］　第三階梯解除
・タフネス［＋生還能力］　第二階梯解除
・強運［＋天運上昇Ⅳ］　第二階梯解除
・装備熟練［＋武器の印］　第二階梯解除
・物理耐性
・全属性耐性
・言語理解
・■■／経験点不足により未解除
・■剣／経験点不足により未解除
・金■力／経験点不足により未解除
・■地／経験点不足により未解除
・■■／経験点不足により未解除

・技■熟練／経験点不足により未解除

明らかに上昇している、それも急激に。
「なにが、くそ、なにが…くそう…」
巫山戯るな、巫山戯るな…
畜生…
気を失った清正の傍に、いつの間にかひと振りの剣が突き立てられていた。
【…】
一時の静寂だけが、青年にとって唯一の救いなのやもしれない。